

三好十郎論(四) : 知識人とは何か

田中, 単之

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

20

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

1968-06-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019225>

三好十郎論 (四)

——知識人とは何か——

田 中 単 之

IV 戦 後

——友吉↓佐山↓ゴッホ↓「私」の行程

8

「夜の道づれ」の後、「殺意」「トミイのスカートからミンがとび出した話」「ともしび」等、いわば庶民の系譜に属する作品を書いて一年、三好は、芸術家の孤独と苦悩をそれ自体としてゴッホの像に定着させ、「炎の人」(昭26・9)を書いた。「ゴッホが狂乱状態になって行く所を書いている時など、私の眼までチラチラと白い火花を見たりした。書きながら、だから、ゴッホが錯乱して行く、行かざるを得ない必然性が、はじめてマザマザと私にわかった」(河出版作品集あとがき)と三好は言うのであるが、たしかに、私の目には、作品「炎の人」は、三好十郎の自画像であるかに

見える。そのような切実さにおいて三好はゴッホとつながっている。肉体的精神的な死闘ともいうべきものを通して、ついにドン底の坑夫等を救い得ず、神を疑い、牧師をやめるゴッホ。そのいわば転向ともいうべき時点で、ぬきさしならぬ関係で芸術とつながってしまふゴッホ。肉体破れ、魂疲れ果てて、神をも祈れなくなった時、ゴッホの魂を奪い、その姿を描かせないではおこなくさせたもの、それは、ドン底の中で死んで行った息子の冥福を、ドン底のなかで祈る老婆の魂であった。かくて「貧乏人の画家」としてスタートしたゴッホの、高く貴い魂とその芸術は、同時代の何人からも、ゴーガンからさえも、正当には理解されず、孤独と、病苦と、貧窮の中で狂気して行かねばならなかった。その精神の過程をマザマザと見た三好は、殆ど絶叫するのだ。「貧しく素朴なる人々に／げなげに生きる勇気を与える／このような絵を／あなたが生きてる間に／一枚も買おうとしなかった／フランス人やオランダ人やベルギー人を／私はほとんど憎む／ことには又／こんなに弱い／やさしい心と／こんなに可哀そうに傷つきやすい魂を／あなたが生きてる

間に／愛そうとしなかったフランスの女とオランダの女とベルギーの女とを／私はほとんど憎む／ほとんど憎む！」

こみあげる涙をこらえて私は今この論をすすめているのであるが、この涙の中でなお私は思わないではおられない——ゴッホの絵を真に必要とするのは「貧しく素朴なる人々」であるが、それらの人々にゴッホの絵が、一枚でも買い得たか。第1幕に描かれた坑夫らの惨状から推して、私には、それは不可能だったろうと思われ。とすれば、ゴッホは、だれのために描くのか。深い意味においてではあるが、それはやはり、自分のためだったろう。絵がなければもはや生きては行けない、その芸術家の宿命とその魂の高さに深い敬意を捧げないではおられない私ではあるが、おのれ、書くということの意味を、自覚的に把握しなければ、もはや書くことさえできなくなる知識人作家の苦悩と比べる時、前者はやはり、幸福な人と言えはしないか。

三好十郎ははじめ画家を志した。そしてその才能も、大方の嘱望を集めるほどのものであった。芸術と純粋につながることに、自らの生命を、燃やし燃やして燃え尽きる道を選んでいれば、三好は、もつと幸福だったのではないかと思う。三好をして作家の道を選ばしめたものは、彼の内部の知識人であったと私は見る。その知識人の苦悩を生き抜いたところに、三好十郎の栄光と悲惨があった。

だから、私は、この論文の冒頭に紹介した「願いごと」の若い女の必死な姿勢を、大衆を遮断し、美や神につながるうとする、芸術家や宗教家の孤独、とのみは把握し得ないのだ。

9

さて、「胎内」でひつつかんだものは、限界状況をバネとしてニヒリズムを克服し、観念を武器に、権力と抗争し、結局は庶民を愛して、窒息の寸前まで生む力を持続する姿勢だった。その姿勢をつきくずすほどの力をもって襲った「出離」の思想をもちこたえたのは、あくまでも社会につながるうとする作家の姿勢だった。その作家の芸術への姿勢を、「炎の人」において、純粋に極限まで追求する時、そこから、あわや知識人の要素が脱落しようとした。このつきくずされる知識人の要素を「冒した者」まで保持する、その支えとなったもの一つとして、私は「愚者の楽園」の活動を見たいのだ。

「総選挙で自由党が国会議席の過半数を取って再び吉田内閣ができた事は、国民の過半数がこれまでの吉田内閣の政治を是認したという事である。平和条約や安保条約から破防法や保安隊のやり方に至るまでを国民の過半数が支持しているという事だ。これはほとんど信じられない程に絶望的な悲しい事であるが、事実である。悲しかろうと腹立たしかろうとこれが今のわが国民の程度だ。これをわれわれは認めなければならぬ。

自由党を支持した国民を軽蔑することはいつでも出来る。しかし、インテリがこぞってこれ程までに嫌った吉田政治を好いている大衆がこれ程多数おり、そのインテリと大衆との間になんの懸け橋もないということ、そしてこれが共に国民であるという現状を軽蔑するわけには行かない。

民主主義とは、それがたとえ個人にとっては不服であっても、多数の決定には従うという主義だ。吉田政治がどんなに愚かしい誤った政治であったとしても当分われわれはこれに従わなければならない。その愚かしさや誤りがわれわれに耐えがたいものであるならば、われわれは大衆の方を向いてその事を話しかけ、なっとくさせて、つぎの機会には自由党に投票しないように大衆を動かさなければならぬ。まだるっこい話だが、われわれが民主主義を最善の政治システムだと思えば、それ以外の道はないし、あつてはならない。

要するに今度の選挙はインテリの独善やゴウマンさがこつびどく批判された事件であった。インテリは再考三思して謙虚に反省すべきである。

もちろん、とは言っても、これはインテリ自身が今後正直に勇敢に吉田政治を攻撃することを手びかえる理由などには絶対にならぬ事だし、またそうであつてはならないだろう（昭和27年10月21日読売新聞「愚者の樂園」）

三好十郎がマスコミの世界に降りて行き、読売新聞に「愚者の樂園」と、自ら銘うって、毎週、実にリチギに執筆することをはじめたのは、「炎の人」脱稿より一ヵ月余り後の、昭和26年10月1日からである。以後28年10月1日まで、まる二年、うまずたゆまず書きまくる。社会時評である。

講話、安保条約の成立を中心に、日本の反動化が着々すすめられていたこの時期における彼のこの活動に、私は、彼の意識的なアンガー・ジュマンを見る。この活動の内容の詳細な分析と、三好の全評

論活動におけるこの期の位置については、いずれ稿を改めて論じなければならぬことなので、今は省略するが、ごく大まかに言えばこの「愚者の樂園」に至る前の評論は、要するに文芸評論であったのだ。それが今、ここで、文学を通してではなく直接大衆に語りかけることをはじめたのだ。自らを愚者と規定し、大衆のなかにどかりとあぐらをかき、愚者よ集まれ集まれといった姿勢や、時たま「投書歓迎」などと書き、読者からの手紙を集め、それに答えた、というやり方から推して、彼は明らかに、知識人と大衆の共通の広場を意図していたのだ。（ただ、ここに引用した日付のものだけは、「信じられないほどに絶望的」な悲しさにぶつかり、その調子がややくずれ、インテリに語りかけるものとなっている）

しかし、三好の立場は、「真理の過激主義」と言われるようなものからはほど遠かった。否それどころか、サルトルによって、「モラリスト」「理想主義者」「ニセの知識人」と罵倒されるまさにそのものであった。三好は「愚者の樂園」で、吉田首相や池田蔵相その他保守反動の政治家どもに対して半ば体質的な嫌悪感をもって、その政治を憎悪し攻撃しながらも、日本共産党に対しても、ガンとして一線を画していた。憎悪や攻撃はなされていないけれども、日共のやり方をテンから信用していないことは、その文章のはしばしに表れている。三好は「コンミュニズムは、社会や国家や世界を考える場合に、かなり参考になるところの、しかし絶対的真理などではないところの一つの考え方」としていて、サルトルが、マルキシズムを、二十世紀の乗り越え不可能の哲学と断じ、実存主義はそれの不満を補うものであるにすぎぬ、とした態度と決定的に異なっていたのだ。そこから三好の朝鮮戦争等に対する態度決定保留の態

度が生じてきているのだ。しかしその態度は、おそらくは、サルトルの目には、傍観的「にせの知識人」として映ったにちがいないところのものだ。

私はここで、その「反抗的人間」をめぐる、いわゆる「革命か反抗か」の論争をサルトルとの間に展開したカミュについて思わないうでいられない。その悲惨な生い立ち（一歳で父を失い、啞に近い母、祖父母と貧民窟生活）と経歴（共産党入党―脱党、演劇への情熱）さらには、地中海的^レと評される自然児の詩情、「シジフォスの神話」に見せた生死観、そうしてマルクスの歴史観の拒否、かくて至りつく、「反抗的人間」における中庸の哲学。私はこの海のかたに生まれた現代の一知性の、三好十郎との驚くべき一致に、目を見張らないではいられない。けれども、いまはその比較検討の場合ではない。要するに今私が言いたいことは、革命か反抗かと問われたならば、三好は即座に反抗をとり、革命を捨てた人間だということである。「革命によって人間の解放を企てるのはすでに古い觀念である」（反抗的人間）とカミュは言うが、三好は「われわれが人間相互間の論争の仕方を一旦誤れば、場合によって人類全体が、またはこの地球そのものが絶滅したり破壊されてしまう危険の前に立たされている（略）われわれ十九世紀的な、または二十世紀前半的な考えの習慣から、いま卒然として眼をさましてこの事態を眺めなくてはならない」（「共産主義と私」未発表、未定稿）という。カミュの「革命の颯風の効果を」という「中庸」と「漸進」の主張は、そっくりそのまま、三好の主張であったということはこの二年間の「愚者の楽園」だけをとってみても、明らかである。

ただ、サルトルが、おそらくは、カミュを念頭において発言していると思われる「にせの知識人」たちのアルジェリア問題に対してとった態度へのいらだち、「モラリスト」「理想主義者」の態度は結局は、現実に、だれの味方となっているか、という問題は無視できない。そしてこれは、言われるまでもなく、カミュの胸を苦しく噛んでいたことにちがいないのだ。しかしカミュは、「カピリア地方の悲惨」で、圧政に虐げられたアラブ人を直視しておりながら、しかも説くところは、「アラブ人と原住フランス人との相互平等と自由を基礎にした共同体」なのだ。そのようにしか、ついに説き得ない人類全体の危機の状況と、自らのふるさとなるアルジェリアの悲惨の前に立つカミュの苦悩に、私は思いを至す者なのだ。

さて、私は私の命題にかえらねばならぬ。三好十郎の願い、ごとは何だったか。

三好は、インテリと大衆との間の、ほとんど絶望的に深い断絶につき当った。いや、自分が一年や二年マスコミにタッチしてみても、反動政府を倒すことができなかつたというような底での絶望的ではない。そのような意味でなら前記引用でも明らかのように、絶望などしてはいないし、そんな甘い期待でこの仕事をはじめたとは思われない。とはいえしかし、その種の絶望も皆無とは言えなかつた。28年「吉田茂と鳩山一郎の首班あらそい当時そう思ったが、問題全体がナンセンスだ。吉田が首班になろうと鳩山がなろうと、われわれ国民になんかひっかかりもない事でどっちも引っこんだらよい」にはじまる自由党攻撃の後に「国民諸君よ」と呼びかけ、「このような連中を代議士に選んだのはあなたがたなんですよ。私はお願いします。これを、どうすればよいのですか？ どうぞ教えて下さい」

と投書呼びかけた。そして「非常に多数の投書が寄せられた」(28・2・13日号)けれども、そして多くの奇抜なアイデアもあったけれども、「私が答えてほしいと望んだ人たち、即ちこの前の選挙で自由党に投票した人たちは、ほとんど全く答えてくれなかったわけである。つまり、この場合もまた、その必要な人はいくら言っても必要をさとらず、さとした人には言う必要がなかった」ここから、すでに、第四次吉田内閣の成立を予感し、28年4月17日「すると大衆は安保条約や保安隊や破防法や植民地化に満足しているということになるのか? そのへんのことを考えると、私には今の日本の大衆が、『大衆のエイ智』を失いかけていているような気がする。／＼ほんのこの間まで政権私闘に歯をむき出していたタヌキやムジナやキツネなどまでが再選されるらしいと言うに至っては論外だ」

ここで、この賽の河原にも似た啓蒙を、さらに執拗にくり返す必要をこそ悟れ、絶望して投げ出すような三好でないことは明らかである。事実、この欄を臼井吉見にゆずって後も「サンデー毎日」「中部日本新聞」「読売新聞」等に、その死の寸前まで、この種の活動を続けるのである。三好の断絶と孤独はもつとちがうところにあった。

10

「三十八度線は線だから幅はない。幅のない所に人は立てない。しかし人は三十八度線を頭で考えることが出来るならば、どうしてそこに立てない事があるのか。そこに立った次の瞬間に死んだとしても、五秒そこに立ったという事は、五十年でも立てると言う事だ。……そうだ、イエスカノウかを決定することは、いつでも出来る。

る。第一の道を歩もうと、第二の道を歩もうと、たやすく出来る。われわれは既に力の前では奴れいだ。その力がいづれの側の力であろうと、大した変りはない。決定はやさしい。大事なことは、そして困難なのは、決定を最後の時まで、圧力が極限に近くなる時まで、窒息の間ぎわの、そのトコトンの所まで引きのばし、持ちこたえることだ。引きのばし持ちこたえ乍ら、その中で衰弱せず、最後の時に、追いつめて来たものを振り返り、面と向ってそれを審判しノウと言ふことだ。それだけの力を保って行くことだ。それが出来るか? 出来る! いや、出来ないかな? いや、いや、出来る。出来ようと出来まいと誰かが、誰でもが、しなければならぬ。……聞いているかね。お前、私はそれをしようと思う。そういう聞いて明日から闘おう。私の生き甲斐は、もうそこにしか無い。どうだね? 私は人から笑われるね? 刻々に、絶望だけが私を見舞うだろう。それを知りつつ、私は頬に微笑を絶やさないうで、窒息に近づいて行く。しかし最後まで窒息はしないよ。お前は、わかってくれるか?……右側の人たちと左側の人たちが、その時その時で、代る代る私をあざ笑ったり、おだてたりするだろう。そしてどちらからもホントの味方だと思われることは絶えてないだろう。嘲笑されない時には利用されるだろう。利用されない時には嘲笑されるだろう。それ以外には全く扱われないうだろう。そして、しまいは捨てられるだろう。捨てられて腐ってしまった時分に、どこからか「人間」が近づいて来てくれるかも知れない」

以上は、「冒した者」(昭29・9)の登場人物「私」のせりふである。

「冒した者」は、悲しいほど滑稽な、現代に生きる人々と、その中で示される知識人作家「私」の姿勢を主題としている。

劇はまず、「私」の、現代への深い絶望を語るせりふからスタートする。「そうだ。もう芝居は、たくさんだ。いつまでやって見ても果てしない話だ。私たちの後ろにかくれて、私たちを踊らせているものがある。私たちはそれに気が附かずに、自分は自分の意思で自分のイノチを生きていると思っっている」

この、後ろにいるやつとは誰か。作者によって何ひとつ説明されることなく、まただれのせりふともわからず書き進められてくるこの作品は、はじめから読者の理解力に挑戦してきているかのごとくである。私はそれを「現代」と解釈する。何をしても、それは一方の勢力に組込まれ、争い踊り、得意になり、しかもそのクビのネツコは、現代という非情なメカニズムにガッチリとおさえられてある。そこで、どう生きても、自分のイノチを生きていることにはならないのだ。

しかも「私」は今、妻を失った。妻とは、あの「浮標」における「美緒」を思えばいい。つまり自らの生きる根元的支え、生命力、それを失ったのだ。「私は自分がどう言うわけでここにこうして生きていくのか、生きておれるのか、まるでわからない」ところの「私」けれども「浮標」と異なる点は、「浮標」ではそこで作家の次元を獲得し得たのだが、今は「私の瞳孔は散大してしまったのだ。既に何一つ見ない。しかしすべてを見ています。そして、ただ見ているだけだ。阿呆のように、ただ見ているだけだ。見ているものの意味をわかってはしない。この眼は既に「意味」に疲れてしまっただのだ。この眼には生まれの荒くれた現実のひとにぎりだけ映るだけ

なのだ。だからもう私は芝居は書きたくないと同時に実は書けもしないのだ」

そして今、奇妙な家に住んでいる。三階建ての室数二十四五、しかし焼夷弾を食ったりその他で、使える部屋は七つ八つ。この家に住んでいるのは、家主（元満州国の大官の未亡人。90歳。広島で病床にあり、死を待っているばかり）から管理をまかされている浮山。それから医者舟木、その妻織子（クリスチャン）その弟省三（大学生。左翼運動に没頭している）。株屋の若宮、その娘房代（進駐軍施設へ勤務。オンリーミたいなこともやっているらしい）また柳子（この家の主人の大官の妾腹。長唄の名取り、三味の名手）。もう一人モモ子（浮山の遠縁。原爆にあい、盲目となり孤児となった）。そして、これらすべての人物は、「私」によって、「みんな良い人たちで、お互いの間にゴタゴタや不愉快なことは起きない。一同互いにむつみあい、親しみ合いながら、お互いの中へ深く踏み込んで行く人はないので、平凡ながら、おだやか過ぎるほどにおだやかな暮しだ。ガラガラする幸福を持った人は一人も居ないが、落ちついた平和な空気がここにはある。今の世の中では幸福な人たちと言えるかも知れない」と説明される。

これらの人々の個々の像を、みごとに彫り起してくる、作者の力量と、これらの人々が織りなす、錯綜した人間関係と、複雑深刻な人間心理と雰囲気——この作品の魅力の重要部分に今立ち入っている余裕がない。要するに、これら「幸福な人たち」の調子がすっかり狂ってしまうのは、この家に須永（「私」の弟子）がとび込んできてからである。

須永は殺人を犯してきた。心中の約束の前日、須永を残して一人

で死んで行った恋人あい子の養父と母親と、一人の米屋の三人を殺した。その理由は本人にもわからない。ただ、医者舟木によってはそれは、フロイド流の精神分析学で理解されようとして、左翼学生省三によっては、その養父が元軍人で、今またその復活を企てていることや、米屋の服装が兵隊だったりすることで理解されようとして、株屋によっては、唯単なるアプレと考えられ、房代には単なる恐怖の対象であり、柳子は、セックスの深部を突き動かされ——しかし、この男のほんとの恐ろしさは、人を殺すことが、どうして悪いのか全く理解されないという点にあるだろう。

「あい子はまだ自分が死んだんだという事を自分で気が附かないでいるんじゃないかと思うんですよ」「奥さんはご自分が死んだという事をまだ知らないでいられるんじゃないか?」「こうして生きている僕らも、実はもう死んじまっているのに、それに気が附かないで、平気でノコノコ歩いたり物を食ったりしている」須永には、生も死も全く同一のものとして理解されている。そしてその感覚は須永の次の原爆と人類に関する考察と、深いところで微妙にからみ合ってきている。

「神が生きものを創造したことが世の中のはじまりだとするならば、その時から今までの事をすべて台無しに叩きこわしたのが原子爆弾で、ですからすべてがまたゼロから、始まるものなら始まるわけで、つまり創世紀——そういう所に僕らは立たされている」「そんなトテツもない、自分たちにとって根本的に決定的なことが起きてしまってるのに、しかもそれを自分の手で引き起してしまっただけに、——つまり犯しちまってるのに、人間はその事に気が附いていないんじゃないか」

地球がすでに自滅するエネルギーを手に入れ、今その目前に地球がある時に、その地球上の生とか死とかは、一体どのような意味を持ち得るか。かくて須永は、この「現代」に翻弄された、いわば破壊者なのだが、彼自身「現代」となつてこの家を襲っているのかのごとくである。須永がこの家に入ってくるや、幸福な人たちのあつる者は、この家の利権をめぐつての欲望や色欲に狂い（舟木、浮山若宮）ある者はセックスに逆上し（柳子）ある者は恐怖と不安におのき（房子、織子）——もちろん作者のリアリズムは、その中にあつても、自分の心に正直になつて行く省三や、内部に蔵されていた父への愛にめざめる房子やを見のがしてはいないけれども、いやそれをも含んで、ここに描かれてあるものは混乱と狂燥である。そして、それを、人間が正直になつただけだ、と見、目ごろと変らず無邪気なのは、すでに原爆という「現代」そのものに触れてしまつているモモコだけなのだ。モモコと須永は、心理的には最も近い立場に立っている。無気味にも静謐な立場である。

そして、ひとしく、この不安と恐怖の中に立ちながら、ギリギリ落ちついて、この混乱を見すえるのは「私」だけなのだ。この姿勢につながつて、この節のはじめに引用した、「私」のせりふが提出されてくるのだ。私はこのせりふに、「胎内」に出発し、「夜の道づれ」「炎の人」と鍛えに鍛えられ、本質的には「胎内」につながりながら、「胎内」にあつては、いわば、おのれ一個の生の哲学にすぎなかつた観念や、原爆や第三次大戦に対する姿勢が、ここでは、人類的危機として意識され全人類的な基盤に立てる哲学を提出している知識人三好十郎の姿を見るのだ。

第三の道。日本にもすでにひかれてしまつていゝる38度線の、その

真上に立つことを知識人の使命とし、齒をくいしばって、その孤独をこらえている「私」の姿に、私は、三好十郎その人の苦悩を見るのだ。第一幕で示した虚脱を捨てて「私はお前の死と、そして今須永の死とに触って見て、生きて行くことを知った」というその生とは、38度線の上にはしかないのだ。その幅のない地点に立たねばならない知識人の宿命。知識人とは何か？ 三好十郎が、その全重量をかけて定義したこの章の最初にかかげたものを、今、もう一度、私はここにかけねばならぬ。

「真の知識人とは、たえずノイローゼにおかされつつも、どこへも脱出せず、それに耐えて病的なノイローゼにはならず、自分の属している社会全体をどんな種類の絶対主義にも渡さぬための抗毒素として存在しつづける者のことだ」

11

ああしかし、三好の苦悩が、重い石となって私の心に落ちてくるのは、「炎の人」を書いて六ヵ月、「冒した者」を書くに先立って

六ヵ月、その中間に書かれた、謎のような、詩のような、ひとりごとのような「願いごと」を読む時においてなのだ。美に憑かれた芸術家の姿に見えながら、また神につながるうとする信仰者の姿勢に見えながら、どこかちがう、この女の引く暗い苦悩の影。集る人々のそれぞれの願いごとに、利用^レされたり、また、嘲笑^レされたり結局はだれからも相手にされなくなって行く女の姿に、三好は何を見たか？ 第三の道につながるうとするおのれ自身の姿を見たにちがいない。その道は、これら、愛すべき大衆からもそむかれる道なのだ。三好はそれをはっきりと予見したのだ。予見して、なお三好はそこへ立とうとしたのだ。代書人としてのみすごした戦中の姿勢への深い反省が、ここにいささかも影響しなかった、と言えばウソになるうが、そのようなことよりも、三好にとって重要だったのは、^レ現代^と、その危機の問題であったはずだ。虚脱と絶望の現代に身を沈め、沈めることによって、おのれの生の意味と使命をひつつかんで、はい上ってきたのだ。知識人のそのよろこばしい使命と、のろわしい運命をひつつかんで。

(未完)